

# 堀河百首題「苔」をめぐる

内藤愛子

堀河百首題の選定意識には総合性、網羅性、基本性が指向され、『和漢朗詠集』の分類と一致率が高く、『和漢朗詠集』との関係の深さは既に、指摘されている。<sup>注1</sup> 殊に、堀河百首題の雑の歌題はほとんどが新奇な歌題で、二十歌題のうち十三歌題が『和漢朗詠集』と一致をみる。だが、「苔」「河」「野」「関」「橋」「海路」「夢」の七歌題は一致しないものである。そのうち、「河」「野」「関」「橋」「海路」の五歌題は、既に述べたように、歌枕が詠み込まれた歌が多数みられるという共通の特徴がみられる。それらの歌題が選定されるにあたっては、歌枕を詠み込むことを不可欠な条件として設定された<sup>注2</sup>と推察される。

それら以外の「苔」「夢」の二つはどのような設定意識に拠って歌題として設定されたのであろうか。

この二歌題のうち、今回は「苔」の歌題を取り上げ、「苔」歌題の設定意識を探る一つの手がかりとして、歌題の特質に重点を置いて、私見を述べてみよう。

まず、「堀河百首」成立以前に、苔がどのように捉えられ、詠じられていたかを具体的に整理し、検討を加えてみたい。

「苔」は、歌材として『万葉集』から詠じられている。『万葉集』においては、時のながさ、永遠、長久の意に用いられており、「苔生す」という用例が大半である。また、万葉集第七卷の雑歌の部の初めの方に「詠羅」と詞書のある歌がみられる。次のようである。

1120 吉野の青根ヶ峰の蘿蓆誰か織りけむ経緯無しに

この歌は、苔の一面に生えている状態を窺に見たてて詠んでいる。

この歌が入っている『万葉集』巻七は、『同集』十巻と共に辞書的<sup>注3</sup>分類と配列がなされていると小沢正夫氏は指摘し、また、本来は中国の『爾雅』や『釈名』のような辞書、『芸文類聚』や『初学記』のような類書の組織にならったものであるとしている。因みに、『芸文類聚』<sup>注4</sup>第八十二草部下には「苔」という分類がある。

このことから、『万葉集』のこの歌は苔の歌として分類意識に拠った最初の歌と言えるだろう。

また、中国の部類意識の投影がみられる分類配列がなされている『古今六帖』には、第六帖草の分類のなかに「苔」が見出され、四首配列されている。そのうち、二首は祝賀が詠まれ、二首は恋や人事を詠んだ歌である。

34802 常磐なる松に懸れる苔見れば年の縮長き知べとぞ思ふ

34803 石の上に生出る苔のねも入らずよなよな物を思ふ頃哉

34804 奥山の巖の苔の年久に見れども飽かぬ君にもある哉

34805 逢ふことをいつか其日と松の木の苔の乱て恋ふる此頃

同様な辞書的性格をもつ『和漢朗詠集』には、先に触れたように「苔」の分類がなされていないが、漢詩文や和歌の素材として詠じられている。漢詩文においては、例えば、

334 蒼苔路滑僧歸寺 紅葉声乾鹿在林 (巻上 鹿)

459 曉峽羅深猿一叫 暮林花落鳥先啼 (巻下 猿)

のように、それぞれ『千載佳句』、『扶桑集』に典故があり、ここで「山中」や「山居」に分類されている漢詩文が山中の描写の素材として用いられている。『和漢朗詠集』の「賀」「祝」に分類された漢詩文には苔が詠まれていない。和歌は「祝」に一首の分類さみれ、祝賀の意を表わしている。この歌は『古今集』第七巻賀歌の巻頭歌である。

776 わが君は千代に八千代にさゝれ石の巖となりて苔のむすまで

このことから推測すると、苔と祝賀の意との結び付きは和歌における表現方法の特徴と受け取ることが可能であろう。

次に、『堀河百首』以前の勅撰集において苔がどのよう詠まれているかを見てみると、勅撰集の最初である『古今集』では、やはり苔が永遠、長久のたとえの歌材として詠じられる歌一首(343)『和漢朗詠集』776と同歌である。のみで、その他苔そのものでなく苔の袂を詠み、僧侶の粗末な衣服にたとえた歌一首がみられるのみである。

また『古今集』において、特殊な部立である第十巻物名に「さがり苔」という詞書が見出される。物名という部立は特殊だが『文選』や初期三勅撰漢詩集にもみられ、中国文学の影響を受けている。

さがり苔

450 花の色はただひとさかり濃けれどもかへすがへすぞ露は染めける

とあり、二句と三句にさがり苔を隠して詠じている。さがり苔は日陰の葛の異名で、『文華秀麗集』巻下(『日本古典文学大系』)の雑詠のなかに薛羅(かずらの一種)として詠じられているものが二首みられる。121の奉和代神泉古松傷衰歌には「孤松盤屈薛羅枝」とあり、123の冷然院各賦一物、得潤底松に「薛羅常掛千条重。」とある。また、中国漢詩文にもみられるから、さがり苔はそれらを典拠としたものと言えるだろう。

『古今集』以後で、『堀河百首』成立に先行する勅撰集においては、苔は永久をたとえる歌材で、しかも祝賀の意を表わす詠歌や苔衣、苔の袂等という、粗末な僧侶の衣を意味するものとして詠まれた歌が多数みられる。だが本来の苔そのものを歌材とした歌はなく、苔を祝賀の歌材とした詠歌が『拾遺集』巻十八、雑賀に二首見出されるのみである。

このように、『古今集』以降の勅撰集においての「苔」は主題としては定着せず、歌材としても決して一般化されたものと言えないようである。

私家集において、苔がどのように詠じられているかを整理してみると、次のような注目すべき傾向が見出される。それは、『古今集』と同時代に生存した歌人達の私家集である『躬恒集』や『貫之集』

の賀の歌に詠まれ、いずれも屏風歌である。

『躬恒集』（『私家集大成中古Ⅰ』30）では「延喜十五年の御屏風の歌」という詞書があり、

281千代をふる松にかゝれる苔みれば年のを長くなりにけるかな  
松と苔を詠じた歌は『万葉集』にもあるが、松に懸かる苔という発想は漢詩文に拠ったものであろう。『貫之集』（『私家集大成中古Ⅰ』57）では「延喜四年九月法皇の御六十賀京こくのみやすところのつかうまつり給ときの御屏風のうた十一首 いはほ」と詞書がみえ、二首並んでいる。

193松風はふけとふかねとしら波のよする岩ほそ久しかりける  
194こけなかくおふるいはほのひさしさを君にくらへん心にやあるらん

これらは屏風歌である。松や岩は倭絵の画題として用いられることが多く、屏風や障子の絵に松や岩ほと共に苔が描かれているさまが想像される。そのような倭絵の表現手法は松や岩に生えた苔を詠じるうえに少なからず影響を与えていると思われる。このことから、祝賀を詠じる歌材としての苔が定着するのに、屏風歌は一つの役割を果たしていたと察することができるのである。

また、分類を施した歌集の一種に「部類名家集」と呼ばれるものがある。『古今集』と同時代の歌人である坂上是則の家集である『是則集』（『私家集大成中古Ⅰ』39）に祝の部立がみられ、そこには「こけいはほ」という詞書が見出される。この歌は『拾遺集』29巻五の賀に題しらず、読人しらずで収載されている。

25きみかよはあまのはころもまれにきてなつともつきぬいはほならむ

このように『古今集』時代の私家集には、苔が祝賀の歌材として意識されていたと言えるだろう。

次に、『堀河百首』以前の百首歌には苔の歌題や歌材とした詠歌は見当たらない。また、歌合においても同様に、歌題としては見えず、歌材とした詠歌も少なく、しかも、関連があると思われる「祝」「松」「いはほ」という歌題に、苔を歌材としたものが見られないということは注目される。

以上のことから、苔という分類意識は『万葉集』第七巻や『古今集』第十巻、『古今集』と同時代の歌人達の家集や『古今六けてい帖』に見出される。それらは『芸文類聚』等の中国文学の影響を受けるという共通点があり、その点から考えると、「苔」は中国文学の影響が極めて濃い歌題と言ってよいだろう。また、『古今集』時代においては少なからず、苔が祝賀の歌材として意識されていた傾向が見受けられる。

また、『古今集』以外の勅撰集や私家集、初期の百首歌や歌合には「苔」は分類や歌題として見られないことから、『堀河百首』における雑の歌題「苔」の典拠は、直接『芸文類聚』等の中国文学に求めたと考えられるが、『万葉集』、『古今集』、『古今集』時代の私家集等を基底として選定した歌題と推測できるであろう。

次に、『堀河百首』における「苔」歌題の特徴を知る手がかりとして、歌人達がどのように歌題を捉えたかを詠歌に即して分析、整理してみよう。

十六首の「苔」の歌はすべて苔の生えているところが詠じられ、山、岩、庭等が数多くみられ、不可欠な要素と言ってよいだろう。詠歌方法としては、見立てに拠った歌が多数をしめており、そのう

ちの大半は苔の一面に生えている状態を薹や狭薹に見立てている。薹に見立てる手法は『万葉集』にみられ、かなり一般化されたものと言えるだろう。それらは次に挙げる六首である。

1329 佐保姫のあそぶ所かおく山の青根か嶺のこけのさむしろ

1333 雲かゝる青根か嶺の苔薹いくよへぬらんしる人そなき

1334 昔よりあれたる宿も庭にしく苔の薹はふりせさりけり

1335 ふむ人もなき庭の面に秋のよは苔薹にそ月はやとれる

1339 おく山の岩ねか上の苔薹たちゐる雲のあとにそなし

1340 白雲の立ゐる山の苔薹わか片敷の袖かとおもふ

これらの歌は苔の生えている場所が詠まれ、そのうち五首は山が詠まれている。顕季(1333)、基俊(1339)、永縁(1340)の三首は苔と雲の色のコントラストのおもしろさを意識したものと受け取ることができるだろう。

そして、公実(1329)、顕季(1333)の二首は『万葉集』1120に詩句表現の典拠を求めた歌と言える。

1120 み吉野の青根か峰の蘿薹誰か織りけむ経緯無しに

この歌は、先に触れたように『万葉集』第七巻の雑歌に配列され、『詠蘿』という詞書をもつ歌である。この歌から、青根か峰の苔薹という語句を求めたと思わせる。また、青根か嶺という名所は『万葉集』以外に『堀河百首』以前に詠じられた歌が見当たらないことや、学が指摘<sup>注7</sup>されているように『万葉集』に典拠を求めた語句、発想がみられることから、青根か嶺の典故は『万葉集』と考えてよいだろう。

『堀河百首』において、青根か嶺が詠まれた歌はこの二首の他に、歌題「雪」に二首見える。それらは藤原顕仲(954)と紀伊(959)の二首で、いずれも青根か嶺と苔薹が詠み込まれている。

954 苔薹あをねか嶺もみえぬまでよしのゝ山はみゆきふりしく  
959 白雪のふりしきぬれば苔薹青根か嶺もみえずなり行

この二首は苔薹の青色と、青根か嶺の「青」の色彩的重なりのように、青根か嶺の「ね」音の重なりを響かせたおもしろさがあり、同時に、青と雪の白さとの対比を意識した詠歌と言える。また、俊頼の家集である『散木奇歌集』(私家集大成中古1) 62)において、「山の雪をよめる」という詞書の歌に、苔狭薹と青根か嶺が詠じられている。

663 けさはしも青根か嶺に雪つみて苔のさむしろしきかへつらん  
このように、青根か嶺と苔薹との組み合わせは一つのパターンとして『堀河百首』成立の当時には用いられていたということが知られるだろう。そして、『堀河百首』以後には、青根か嶺と苔薹とを共に詠むパターンが定着化する傾向が見られる。

公実の歌(1329)は、青根か嶺と苔薹という組み合わせを『万葉集』に求めながら、苔薹に春の女神である佐保姫の遊び場を想像し、機知的な歌に仕上げている。

これら六首のうち、縁語や懸詞を用いて機知と技巧に富んだものに仕上げている歌としては、源顕仲(1334)と永縁(1340)の二首がある。いずれも「苔薹」の縁語として「敷く」を使っているが、永縁の歌は、「立つ」に「裁つ」を懸け、「裁つ」は「袖」の縁語というように複雑な技巧を用いた歌と言える。その他に、縁語、懸詞に拠った詠歌としては国信の歌(1331)がある。「日かけ」は陽の当らない所と日陰曼を懸けている。その上、苔の縁語として用いられ、技巧を凝らした叙景的な歌に仕上げている。

1331 日かけはふしけみか下に苔むして緑のふかき山のかひかな

また、仲実の歌(133)は『和漢朗詠集』の平佐幹の上句の発想を踏えた跡がみられる。

621 晦跡未抛苔径月 避喧猶臥竹窓風 (巻下 閑居)

次に、角髪や髪に見立てた詠歌は師時(137)と源顕仲(134)の歌である。

137 年ふれば苔のみつらをやゆひかけて岩の姿は神さひにけり

134 ねもなく岩ほの上にむす苔はかみをおほへる心地社すれ

この二首のように岩に生えている苔を髪に見立てる発想はすでに漢詩文にみられ、それらを拠り所にした発想と言える。たとえば、白楽天の「遊・悟真寺詩」に石髪垂若鬢と書れている。このような漢詩文の影響による見立てと共に、「髪」に「神」を懸ける技巧が使われている。また、134の歌のように苔に根がないと詠じ、同様な発想をしたとらえられる歌が「苔」の中にもう一首みられる。それは河内の歌(134)である。

134 年ふれとあたにそみゆるねもさくいかてか苔の岩に生らん

苔に根がないと詠じた歌はすでに『古今六帖』の「苔」に分類された歌に一首みられ、その歌を発想の基にしたと思われる。

13403 石の上に生出る苔のねも入らずよな／＼物を思ふ頃哉

つぎに、苔を煙に見立たた詠歌は匡房の歌(1330)一首のみである。

1330 ふかみとり岩ほかうへにむす苔や空にのほらぬ煙なるらん

本歌や出典を求めることができる歌は三首挙げることができる。

まず、師頼の歌(1332)は、伝説に発想の原拠を求めている。

1332 かつらきやわたしもはてぬ物ゆへに久米の岩はし苔生にけり

この歌の久米の岩橋は、昔役の行者が葛城山の山神一言主神に命じて、葛城山と吉野の金峰山にかけ渡そうとした伝説上の橋で、一言主神は自分の醜い容貌を恥じて夜だけ仕事をしたので、いつまでたつ

ても工事が完成しなかったと伝えられる。その伝説を基にし、苔が生えるまで時が過ぎ去ったとし、機知に富んだ詠歌に仕上げている。

次の紀伊の歌(1343)は

1343 打ならず人もなければ君か代はかけしつゝみも苔生にけり

とあり、『和漢朗詠集』603 国風の漢詩句に典拠を求めた歌と言えるだろう。

603 刑鞭蒲朽螢空去 諫鼓苔深鳥不驚 (巻下 帝王)

この漢詩の後半の発想と表現を使い、天皇の治世を讃える慶賀の歌に仕立て上げている。

『万葉集』の歌の語句を典拠としたと思われるものとして俊頼の歌(1336)が挙げられる。

1336 葎生のけかしき藪の苔上にあたり月をも宿しつる哉

この歌は群書類従本に拠ったが、第二句目の「けかしき藪」が伝本に拠っては「けかしき宿」とあり、「宿」となっている伝本が数多く見られる。もし、「けかしき宿」とした場合は『万葉集』79の第

三、四句目を典拠とした詠歌と考えられるだろう。

79 いかならむ時にか妹をむくらふの穢しきやと入れませむ

この歌は、1334と1335の歌と同様に荒れた家に生えている苔という設定が成されているが、1335は人事詠の要素の強い歌である。また俊頼の歌は情趣的に充足した作品で、創作詩の世界がよみとれる。

肥後の歌(1342)は松という祝賀を表わす歌材と共に詠まれ、苔の永遠、長久を意とするという伝統的な発想を踏襲した慶賀の歌である。そのような歌は十六首のなかでこの一首のみである。

1342 おく山の岩ねの松の陰にてや苔のみとりもときはなるらん

また、さがり苔を詠んだ歌が一首ありそ、これは藤原顕仲の歌(1338)

である。

1338 よこね嶋下はに生るさがり苔露かゝらねとかはくまもなし

よこね嶋は『平安和歌歌枕地名索引』に拠る限り、他には用例がみあたらず、特殊な歌枕、地名と言える。また苔でなく、さがり苔を詠じている。先述のようにさがり苔は『文華秀麗集』、『千載佳句』等の漢詩文にみられ、勅撰集においては『古今集』第十巻物名にみられるのみであり、それらに典拠を求めた珍しい歌材と言つてよいだろう。このように、よこね嶋という新奇な歌枕地名を用いながら、苔という樹木や岩石に生える植物としての特性と、さがり苔（日陰の蔓の異名）という植物名から連想されるイメージを重ね合せて、複雑な趣向を凝した歌となつているのである。

以上のことから、「苔」の歌題における詠歌の特徴は、『古今集』時代には、祝賀の歌材として苔が詠まれた歌は数少なく、苔そのものに着眼したものが大半で、苔を何かに見たてるといふ類型的な詠作方法が指摘される。だが、歌題「苔」の典拠と目される『万葉集』や『古今集』時代の詠作方法をそのまま踏襲したのではなく、それらの発想、表現を意識しながら、詠作方法上の新しい創意工夫がなされたことが指摘できる。

それらは『万葉集』に出典を求めたと思われる青根カ嶺と苔庭との組み合わせを新しい感覚で詠み込んだり、発想や表現を『和漢朗詠集』や漢詩文や中国説話や伝説に拠ったり、縁語、懸詞等、複雑な技巧を凝らした詠作方法を使うなど多岐にわたっている。それは「苔」という歌題が新奇な歌題であるということと無関係には考えられず、新しい歌題に対する詠作方法の摸索と受け取れるだろう。

このような傾向は、新奇な歌題を多数含んでいる『堀河百首』の

雑部において全般的にみられることは既に、指摘した通りである。<sup>注9</sup>

だが殊に「苔」の歌題のように、『和漢朗詠集』や漢詩文や中国説話に発想、表現、修辭等の典拠を求め、漢詩の世界の投影が色濃くみられるのは、「苔」という歌題の原典の特質を歌人達は少なからず意識していたからなのではないかと推測できるのである。また、それらは『堀河百首』における「苔」の歌題の一つの特徴であり、それをこの歌題の特質として捉えてよいと思われる。

注1 松野陽一氏「組題構成意識の確立と継承」(『文学・語学』第70号昭49・1)

注2 拙稿「堀河百首雑の歌題覚え書」(『文芸論叢』第17号)

注3 小沢正夫氏著『古代歌学の形成』第四編「歌集の編集と和歌の分類」(塙書房 昭38)

注4 唐欧陽詢撰汪紹楹校『芸文類聚』(中華書局 1973)

注5 注3に掲書。

注6 萩谷朴著『平安朝歌合大成』に掲載している歌合を対象にした調査による。

注7 橋本不美男、滝沢貞夫氏著『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究篇』(笠間書院 昭51)の本文篇参照。

注8 注7掲書。

注9 拙稿「堀河院御時百首和歌」の雑部をめぐって——『和漢朗詠集』と漢詩文——(『研究紀要』第25集昭56・12)